

さくらサミットと桜文化の醸成

竹林院住職 吉野町前町長

福井 良盟

「さくらサミット」の成立と経緯

一九八七年（昭和六十二年）六月に閣議決定された第四次全国総合開発計画は、「多極分散型国土の形成」を基本目標とし、開発方式として「交流ネットワーク構想」を打ち出した。交流ネットワーク構想の柱は三本。そのうちの一本が、都市と農村との広域的交流など、「各地域の特性を生かした多様な交流の推進」であった。この時代、自治体が活性化していくためには、自治体同士の協力関係をより一層深め、「地域間交流」を促進することにより「交流人口」を増やしていくことが強く求められていた。「さくらサミット」は、こうした時代背景の下、地方の一自治体である島根県木次町（現・雲南市）が先導して始めたものであるが、いかにも「地方の意気込みの強さ」が

感じられはしないだろうか。それはまさしく、四全総が追求した課題への一つの回答であった。

「さくらの咲く健康のまちづくり」を総合振興計画の柱としていた木次町は、「桜」をまち（づくり）のシンボルとし、地域の活性化を図ろうとしている全国の自治体に加盟を呼びかけた。こうして、一九八八年（昭和六十三年）四月、第一回の「さくらサミット」が木次町で開催されたのである。

以来、本サミットは、あくまでも開催地自治体の特性を生かしたテーマ設定としながら、加盟自治体の要望も充足できるように調整して実施されてきている。こうして延々二十年以上にわたり「さくらサミット」が継続してこられたのも、何よりも加盟自治体（注）の各首長が本サミットを愛し、ともかく継続していこうと志した、そのチームワー

クの良さが然らしめたものと思う。

さくらサミット コーディネーター

篠田 伸夫

日本一の桜

さくらサミットに集まる首長のほとんどは、わが町の桜こそ「日本一」だと信じている。正確に言えば、日本一の桜は世界一でもあるわけだが、誰も「世界一」とは言わない。桜論議の場では、日本一は世界一よりも格上なのである。それぞれの桜は、日本一と言ってもよい理由を備えている。長崎県大村市長はオムラザクラの重なり合った花弁の豪華さを、長野県高遠町（現・伊那市）長はコヒガンザクラの可憐な姿を、北海道静内町長は二十間道路に並ぶエゾヒガンの雄大な景観を、秋田県角館町（現・仙北市）長は武家屋敷と調和のとれたシダレザクラ



吉野山の桜
下・中・上・奥の千本に植えられた桜は、総計3万本。すべてシロヤマザクラである

と地場産業の樺細工を、東京都北区長は飛鳥山公園のソメイヨシノを、群馬県鬼石町（現・藤岡市）長は三千本のフユザクラを、島根県木次町（現・雲南市）長は三十万本の桜を植樹するという目標の大きさを、茨城県日立市長は公害から市を救った桜に対する市民の感謝の気持ちを、埼玉県幸手市長は市民と一緒に桜を育てているこ

とを、誇らしげに、熱っぽく語る。サミットといいながら、おのおのの日本一論に異議・反論は出てこない。視点をちよつとずらせば、皆「日本一」なのである。もちろん私（福井）も、吉野山のシロヤマザクラが日本一と言い切った。そして、それぞれの首長の主張する日本一に賛同もした。

さくらサミットが始められたのは昭和の末年である。そのころのわが国は、世界一の経済大国を勝ち取り、追いつけ追い越せの次に目標とすべきスローガンを探し求め、見つけることができないままに、初めてのバブル崩壊に苦しみ始めた。政策的には、多極分散型国土の形成」が提唱され、「ふるさと創生」の一億円を使わせていただくこと

になった。日本一の桜を持つ自治体も地域再生のための施策を模索することになったが、桜を選んだのは、加盟自治体の半数にもならなかったと思う。私が町長をしていた奈良県吉野町でも、結局は桜以外の目標設定を取り上げざるを得なかった。この時の反省から、役場の職員に対して「事業を決める時には、わが町が、日本に、人類のために何ができるかということが一番に考えよう」と言って、「町長の話は遠回りすぎ

る」と批判を買っていたようである。

私たちの吉野町でもサミットを開くことになった。事前会議に担当課長が出席し日程やテーマ等を決定する。日程はこちらの都合で決まるが、テーマに問題があった。「さくらサミットとまちづくり」に決まりました、という報告。「それでは吉野で開催する意味がない」としかりつけたが、事前会議はもう終わっている。妥協案として、テーマを二つにし、「桜文化の醸成」を付け加え、当日配布するパンフレットの表紙にはそれだけを掲げることにした。

この時私は、吉野山小学校の校長だった宮坂敏和先生のことを思い出していた。戦後間もなくのころである。荒廃した吉野山の桜樹林をよみがえらせようと、毎年六月初旬、児童たちの宿題として、サクランボ拾いを命じた。集まったサクランボは、上級生が手を真つ赤にしながら果肉を取り去り、水に浸けて沈んだ種だけを畑にまき、先生と育友会役員が手入れして苗木を作った。育った苗木は、卒業記念樹等として公園に植樹するほか、全国の学校に募って希望本数を送付した。ところがこの活動に住民の一部から疑問が寄せられたようである。

「こんなことをしていたら吉野山の『日本』の座が危うい」と。校長は卒業式の式辞で、熱を込めてきつぱり反論した。「送られた桜は全国の学校で『日本一の分身』として大切に育てられるだろう。それは日本国のためにもなるし、吉野山のためにも良いことだ」と。

桜文化

桜は日本を代表する花木である。大抵の日本人にとって「花見をする」というのは桜の花を楽しむこと、時にはそのために旅行に出かけることである。風景写真に桜の花が入っていけば、日本の景色であって、外国を想像する人はいない。多様な花の中で特に桜を愛でる風習は日本人の特性とも言える。この特性はわが国民の歴史とともにさかのぼるのかといえば、そうでもないらしい。高校の古文の時間に「日本人が桜を特別な花木と見るようになったのは、平安時代、遣唐使の廃止以降の国風文化が興った時である」と教わった記憶がある。中国唐代に特別な力を持つ花とされた梅の木を同じように重宝がっていた上古の慣習が、国風文化の時代に、桜の木に変わっていつ

たというのである。

このような時代的变化は、私ども吉野にかかわる文芸作品にも明確に表れている。八世紀の『懐風藻』や『万葉集』にも吉野を詠んだ詩歌は多数載せられているが、桜と結びつくものは皆無である。一〇世紀初頭の『古今和歌集』になると、紀貫之による序文に「春の朝、吉野の山の桜は人麿が心には雲かとのみなむ覚えける」と記されるほか、三首の歌が取り上げられている。さらに一二世紀初撰の『新古今和歌集』になると、多くの人がたくさんの桜の歌を寄せるようになっていく。新古今の歌が詠まれた平安末期は、西行法師が自己の身体以上に桜を愛し、吉野山に庵を構えた時期でもある。また吉野山・金の御嶽が日本の宗教的聖地として不動の評価を獲得した時代とも重なる。桜は修験道山伏の御本尊・蔵王権現の御神木とされた。蔵王権現の直近に桜を植える献木の風習は、長く吉野山に受け継がれ、桜樹林全体の規模を拡大していった。

一八世紀、国学者・本居宣長は『古事記』や『源氏物語』の中に「日本のこころ」を探究し、時に平安文学に表出された日本



金峯山寺蔵王堂
桜は本尊蔵王権現の御神木として、崇敬者によって献木されたものと伝えられる

精神を「もののははれ」と銘打った。そして、もののははれの精神文化をヤマザクラの姿と重ね合わせることになる。『本居宣長六十一歳自画自賛像』に書きつけられた「しき嶋のやまところを人とはど朝日にほふ山ざくら花」の歌は当時第一級の国学者として、ヤマザクラは日本文化そのものであると言わせたことになる。

異論かもしれないが、日本文化を学ぶ者には、小林秀雄さん等の難解な文章を習読

する傍ら、ヤマザクラをポーッと眺めてい
ることをお勧めしたい。およそ文化は人間
によって創り出される。しかし、人間の創
り出したものすべてを文化と呼ぶものでは
ない。人間の感性に適合し、人々を幸せに
導くものでなければならぬ。文化を創造
するには、天才のひらめきに期待するだけ
ではなく、世代を超えた長い年月の積み重
ね、こだわりの継続が大切なことは言うま
でもない。

桜くらサミット in 吉野

吉野町でのさくらサミットは、一九九四
年（平成六年）四月二十日に開催された。
この年の満開は過ぎていたが、一部の方
にはヤマザクラ特有の花吹雪を味わって
いただけ。私の発言内容は、これまで十七回
の主張と合わせ概略前項のようなものが、
対談の後、会場に意見を求めた。福本藤治
郎氏（年長の町会議員）が、古老の教えとし
て「海の漁師は海で死ぬ、死んで魚の餌に
なれ。山の猟師は山で死ぬ、死んで桜のこ
やしになれ」という訓示を披露してくれた。
吉野山の桜は、日本の四季のうち、春を
代表する風景として、国会議事堂正面口



西行庵
12世紀末、西行法師はここで隠遁生活を送った。現在の建物は再建されたもの

ビー上方に描かれている。二〇〇四年（平
成十六年）には「紀伊山地の霊場と参詣道」
における重要な文化的景観としてユネスコ
の世界文化遺産にも仲間入りすることがで
きた。「顕著で普遍的な価値」を有し、後世
に残すべき人類の遺産として世界中から認
められたことになる。それでも、吉野山の
住民も桜の保護を担っている財団法人吉野
山保勝会も「世界一」とは言わない。「日本

一の桜の名所」であり続けたいと願っている。
桜は恐ろしいまでに人間に似た生物であ
る。吉野山の桜は近年、老衰の兆候が見え
始め、たくさんの人々に「心配をおかけし
ながら、一方、JTB、京都大学、住友信
託銀行、読売新聞等のご支援を得て若返り
を図っている。
桜を守っていくには、西行や宣長に学び、
自己の身体と同じ値打ちあるものとしての
符合を続けねばならない。

（ぶくい りょうめい）

（注）平成二十一年三月現在の加盟自治体（二十団体）
新ひだか町（北海道） 柴田町（宮城県）
仙北町（秋田県） 富岡町（福島県）
日立市（茨城県） 前橋市（群馬県）
北本市（埼玉県） 幸手市（埼玉県）
北区（東京都） 新発田市（新潟県）
上越市（新潟県） 伊那市（長野県）
本巢市（岐阜県） 吉野町（奈良県）
南部町（鳥取県） 益田市（島根県）
雲南市（島根県） 大村市（長崎県）
水上村（熊本県） 北郷町（宮崎県）

問い合わせ

「さくらサミット」常設事務局／

（株）ぎょうせい開発課

TEL: 03(6892)6636

加盟自治体を随時募集